

倫理教育とは何か？

—不正、捏造、賄賂、談合、隠蔽から、哲学、人生観、世界観まで—

慶應義塾大学理工学部機械工学科教授 前野隆司

慶應義塾大学理工学部機械工学科が JABEE の認定申請をすることになった 2002 年ごろ、実を言うと、私は、倫理教育反対派だった。倫理観、道徳観というのは全人格的なものであり、大学の理科系学部で教えるようなものではなく、各人が各人の生き方の一部として、様々な経験から学ぶべきことなのではないか。それに、経験豊富な年長者が講義をしたって、それを聞くべき倫理観のない若者に限って話を聞いていないだろうし、彼らは聞いても理解しないか反発するだけではないのか。それに、倫理を教える先生なんて、ソクラテスとかアリストテレスの話を開かせるつまらない学者か、うさんくさい説教ばかりする年寄りなんじゃないだろうか。そもそも、いい人になりましょう、という教育をしたって、そう簡単に人間は変わるものではないのではないのか。さらに言えば、世の中の不正、捏造、賄賂、談合、隠蔽、手抜き工事など、技術者や組織の不祥事についての講義なんて、なんて後ろ向きで暗い感じなんだろう。もっと前向きで明るく創造的なことを教えるべきだ……、等々。今思えばずいぶん勝手なことを思っていたが、しかし、倫理という響きへの普通の人の反応はだいたいこんなものなのではないかと思う。

私の元々の専門は、超音波モータ、触覚センサ、ロボットのデザインや、ヒトの触覚機構の解明である。ところが、慶應義塾大学理工学部機械工学科の JABEE 申請に関連して、色々な方と倫理について議論しているうちに、いつの間にか私が技術者倫理科目を担当することになった。気がついてみると、機械工学科の 4 年次必修科目「創造と倫理」を担当して 5 年になる。この中で、色々な方を特別講義にお招きしたり、様々なディスカッションをしたり、色々勉強したりしてきた。その結果（もしかしたら倫理教育を担当している教員の中では変わり者の部類に入るのかもしれないが）、私自身、私なりの「倫理教育」に対する考えというか立ち位置が定まったつもりである。それを以下にご紹介したいと思う。理屈っぽいことを述べるやつだと思われるかもしれないが、技術者倫理について考えるためには、まず、共通基盤としての倫理学体系の基礎と原則を理解することが必要であり、そうであるにもかかわらず、現状ではこの点についての理解が一般的に不十分であるように思うので、僭越ながらあえて考えを述べたいと思う。

技術者倫理は応用倫理学の一分野である。では、そもそもの倫理学とは何かというと、「〇〇すべきである」かどうかについての科学である。科学技術が「〇〇である」こと（つまり、真理の探究）についての科学（+技術）であるのに対し、倫理学は価値についての科学なのである。一般に、倫理学は哲学の一分野であると考えられるので、倫理学は価値についての哲学であると言った方が妥当なように感じられるかもしれないが、哲学は人文科学の一分野なので、やはり、倫理学は価値についての科学なのである。「悪いことはすべきではない」ということの教育が技術者倫理の主要課題であるとお考えの方々には、それ以外の「〇〇すべきである」は興味の対象外かもしれないが、少なくとも生命倫理や環境倫理では「環境はどうあるべきであるか」や、「生命はどうあるべきであるか」が議論されており、やはり倫理は「〇〇すべきである」こと一般の科学であると再確認せざるを得ない。さて、倫理学では、「〇〇である」から、「〇〇すべきである」は導けないと言われる。

確かに、「この自動車は走るためのものである」から「この自動車は環境負荷が小さいべきである」や「安全であるべきである」は演繹的には導けない。工学では、一般に、価値は設計の目的または拘束条件なのであって、解析の対象や設計の変数ではないと考えられてきたように思われる。つまり、価値の問題は、工学一般の問題ではなく、哲学（あるいは政治や経営）の問題であると考えられてきた傾向がある。しかし、ものを作るときには、コストがかからないべきである、性能がいいべきである、効率がいいべきである、安全であるべきである、環境負荷が小さいべきである、など、様々な（広義の）倫理的判断が必要なので、設計学がこのような複合領域的な（マルチディシプリナリな）価値を含む以上、工学は本来的に倫理を含まざるを得ないといえることができる。

では、「〇〇すべきである」という規範はどこかに確固として存在するか、という議論をすると、技術者倫理教育を行われている多くの先生方は、「もちろん存在する」という立場を取られるかも知れない。確かに、不正、捏造、賄賂、談合、隠蔽、手抜き工事をしてもいいかといわれると、すべきではない、というのが正しい判断であろう。しかし、気をつけなければいけないのは、倫理学と（狭い意味での）技術者倫理教育とはスタンスが異なるという点である。哲学の一分野としての倫理学では、不正、捏造、賄賂、談合、隠蔽、手抜き工事をすべきではないということが真理であるとは必ずしもとらえない。真理が存在するという立場は、格率（行為や論理において、証明の必要がない本質的・基本的な命題。公理。準則。格言。）が存在するというカントの立場に代表される。一方、「最大多数の最大幸福」こそが価値基準である、という功利主義的な立場では、絶対的な真理などそもそも存在しないと考える。それぞれの社会に法体系やコンセンサスがあるのみである。あらゆる社会システムにおいて、そこで整備された法に照らして問題があることをしてはいけないに過ぎないのである。そして、哲学が到達した現代とは、絶対的価値があるというカント的な立場も、ないという功利主義的な立場も、真であるとはいえないことが明らかになった、ニヒリズム的な世界なのである。哲学的な経緯は省略するが、これは自明であるように思われる。もちろん、このことはいまだ全人類のコンセンサスではなく、異論も大いにあるのであろうが、私は、現代は徹底的にニヒリズムの時代であるという立場に立つ。したがって、私たちは、ここを出発点にして各人の倫理観を構築しなければならないと私は考える。例を挙げるなら、自殺はいけない、一夫多妻はいけない、賄賂はいけない、というような一見絶対的に見える価値は、その社会のコンセンサスに基づいて形成された局所的な価値に過ぎないのである。本来、仏教修行僧の悟りの境地は自殺に限りなく近いし、一夫多妻は生物学的には自然である。賄賂と謝礼の違いは法律や現代社会の常識にもとづくコンセンサスに過ぎない。誤解しないでいただきたいが、私は、自殺や一夫多妻や賄賂を容認しようというのではない。絶対的な価値は存在しないけれども、現代日本でコンセンサスの得られた価値はローカルな価値として認めるという立場から議論を始めるべきだといいたいのである。つまり、技術者倫理教育とは、単に技術者はこれをしてはいけない、といったような技術者が直面する課題解決法の教育ではなく、各個人が各人の世界観を持ち、それに照らして価値判断をできるように、価値とは何か、もっといえば自分はいかに生きるかという根源からすべての問題を考えるための基礎を形成するためのものであるべきだと思うのである。さらに言い換えると、私たちが生まれてから死ぬまで、いや、人類が生まれてから滅びるまで、宇宙ができたときから遠い未来まで、すべての事柄は接続された一連の非線形・非定常な出来事であるという複雑システム思考の立場に立って、あらゆるシステムのふるまいは独立には存在しないばかりか、すべての事柄に唯一絶対の正解は存在しないことを理解し、その中での部分としての自己の行動基準を考えるための思想形成

こそが技術者倫理教育だと考えるのである。

至近な例を挙げると、皮肉にも、現代の科学技術が招いてしまった地球環境問題を無視して技術について語ることはもはや不可能になっている。不当表示がその製品の価値にどのような影響を及ぼすかを考えることが不可欠であることも、同様な問題構造をしている。技術者の判断が、その職務のみならず自らの人生とどのように関わるかを考えることの重要性もしかりである。したがって、繰り返すが、この宇宙に存在するあらゆるシステムのふるまいは独立には存在しないことを理解し、その極めて大規模なシステムのほんの一部としての自己がいかにかに生きるべきか、振舞うべきかを考えることが、技術者のみならず現代人にとって今や不可欠な課題となっているのである。

このため、慶應義塾大学工学部機械工学科の「創造と倫理」では、哲学としての倫理から、人生の先輩方の講演、人生観や福澤諭吉の世界観の紹介、それらについてのディスカッションまで、複雑システム構造理解のための様々な視点からの講義をバランスよく配することによって、狭い意味での技術者倫理教育ではなく、多様な価値の問題の幅広い理解を養うことを目指している

(<http://www.maeno.mech.keio.ac.jp/Maeno/JSME2007> 連載講座技術者倫理教育の最前線.pdf 参照)。大それたことを目指しているとお感じの方もおられるかもしれない。確かに、目指すことは広範囲であるが、木を見て森を見ず、ではなく、木も森も、そしてそれらの関係をも見る力を持つことの教育こそが重要であると考えているのである。

実は、私自身は、慶應義塾大学工学部機械工学科（大学院は理工学研究科総合デザイン工学専攻）から、2008年4月に新設される慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科に移籍する。システムデザイン・マネジメント研究科は、まさに、木と森の関係を理解する者を育てる場であり、その設立の意図は私の倫理教育についての問題意識とほぼ等価である。すなわち、システムデザイン・マネジメント研究科は、すでに何らかの専門を極めた実務経験者に対し、地球環境・社会環境・使用環境を含むあらゆるステークホルダの価値（もちろん、不正、捏造、賄賂、談合、隠蔽、手抜き工事を行わないことも価値の一部に含まれる）を考慮して大規模複雑システムをデザインできるための教育を授ける場である。これはまさに私が技術者倫理教育において行っていること、そして今後さらに深めてゆきたいことに他ならない。今後も慶應義塾大学工学部機械工学科の「創造と倫理」を担当しつつ、システムデザイン・マネジメント研究科においては、科学技術哲学、科学技術倫理の教育・研究を行ってゆきたいと考えている。大言壮語と言われるかも知れないが、私は、全人類を、そして全人類の生きる地球を、いかにすればより幸せにすることができるか、このことを第一テーマとして教育・研究を行ってゆきたい。これこそが広い意味での技術者倫理であると考えている。

2007年12月